

大阪くらしの今昔館所蔵品を巡る

大坂画壇の絵師たち

7. 吉村周山 その2

大阪くらしの今昔館には近世の大坂画壇の絵師による作品が所蔵されています。それらの中から注目すべき作品を紹介していきます。

吉村周山(1700~73)は名を充興、号を探仙叟、探興斎などと称し、大坂・島之内油町二丁目に住んだ絵師でした。狩野派の性川充信に絵を学び、一家をなして後は『和漢名筆画英』『和漢名筆画宝』など、古今の名画を写した絵手本を刊行し、法眼にも叙せられました。安永6年(1777)の『難波丸網目』によれば門人が18名おり、相応の画派を形成していたことが分かります。一方で根付彫刻にも巧みで、天明元年(1781)『装剣奇賞』などに根付作者として名前が記されるほどでした。しかしある時から根付細工を一切やめて、画道に専念したそうです。

吉村周山については第1回で鶴図屏風を取り上げましたが、今回は大坂の町家に伝わったとされる襖絵を紹介します。ここでも周山は得意の鶴図を描いています。

吉村周山「鶴図」襖 (紙本墨画淡彩 右2面:各176.8×115.8 左4面:各176.4×96.5cm)

稲の刈り取られた晩秋の田に、丹頂鶴や真鶴の群れが舞い降りて遊ぶさまを6面にわたり描いています。右端の2面には首を伸ばして左上方を見る鶴の一群が描かれています。鶴が見ているのはその左手にある4面の襖に描かれた飛来する2羽の鶴です。その左下には飛び立とうとする鶴、その左上には飛びながら誘うように振り返る鶴、そして左端には右を向き羽を休める鶴が描かれています。6面の襖には鶴がジグザグに配され、しかも互いに呼応して躍動感のある画面を展開しているのです。画面の下に水平に描かれた畦道は、動きのある画面に統一感をもたらしていると言えます。金砂子は当初からのものと思われ、朝の光を思わせます。畦が白いのは朝日に霜が

照らされているのでしょう。右2面と左4面の間には柱があり、裏面の絵などからL字型に折れ曲がっていたと考えられます。部屋の角を効果的に利用し、奥行きのある画面を展開しています。この部屋に座る人は、鶴の群れの中に身を置いたような錯覚に陥ったのではないのでしょうか。襖の左端に「探僊叟法眼周山筆」という落款があります。



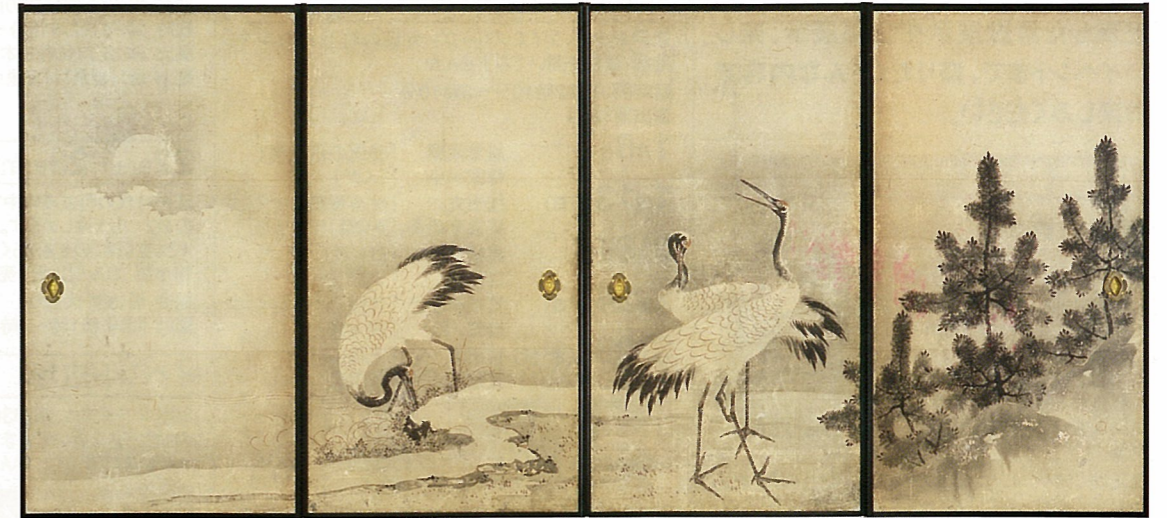
鶴図 右2面



鶴図 左4面

吉村周山「松鶴図」襖 (紙本墨画 各176.7×96.3cm)

右端に若松、左端に臘月と、春の季語である景物が描かれることから、春宵の風景と思われます。画面右に捺された印面は摩耗により判読できませんが、筆致からみて周山の筆であることは間違いありません。周山は先の襖では彩色を用いて飛翔する鶴を描き、躍動感のある華やかな画面を作り出しました。一方、本図では水墨を用いて刈田にたたずむ鶴と月を描き、静かな情感のただよ画面としています。中央でS字状に曲がった畦道が、画面に変化を与えています。

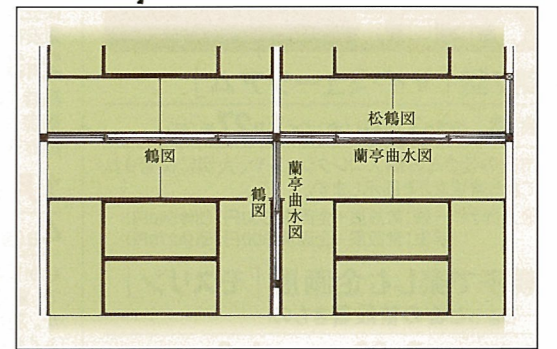


松鶴図

本図と左頁の鶴図の一部は、第3回で紹介した江阿弥(1693~?)の「蘭亭曲水図」襖の裏面にあたります。おそらく元の町家では、右図のような配置であったと考えられます。周山は江阿弥よりも7歳若いのですが、

早くから法眼に叙せられ、弟子も数多く抱えていました。両者は競作になることを十分に意識しながら描いたものと思われ、双方ともに優れたできばえの作となっています。制作年代は周山が法眼、裏の江阿弥が法橋であった寛延2年(1749)から宝暦12年(1762)の間と考えられます。

(岩間 香 摂南大学教授)



襖配置復原図

見どころ くら話 くら

大阪くらしの今昔館が設計段階からこだわった展示の中身や、ふだんは気づかない展示の裏側をご紹介します。

「システムキッチンの始まり?」

現代では当たり前となったシステムキッチン。公団住宅が売り出され、昭和32年ごろからさかんに使われた用語です。雑然とした台所仕事をコンパクトにまとめ、水仕事が楽になるという触れ込みで、女性にはたいへん人気がありました。このことは、水仕事が女性にとって永遠の課題だった証なのかもしれません。こうした水仕事は江戸時代までさかのぼってみると、現代生活では常識とされることが決して当てはまらない暮らしがあったことに気づかされます。

まず、江戸時代大坂市中の人々は「水」は買うものでした。一般的には、井戸を掘削し汲み上げればよいと考えがちですが、大坂市中の井戸は金気や塩気が強く飲み水には適さず、もっぱら炊事・洗濯に使用されました。飲み水を得る井戸になればよいのですが、なら

なかった場合、どのように飲み水を確保したのでしょうか。当然のことながら、「水屋」から買うしかなかったのです。家々では、軒先に「水入用」の木札を下げて一荷いくらの代金を払って水を買っていたのです。明治時代には、二斗(36リットル)入り桶ふたつで八厘前後で取引されていたといわれます。飲料水は貴重なものだったのです。

では、江戸時代の台所はどのようになっていたのでしょうか。ガスもなければ水道も電気もない暮らしを想像してみてください。土間の隅に井戸があり、買った飲み水を溜める水壺があり、煮炊きをするヘツイ(かまど)があります。そして食器を収納する水屋があり、板の間で座って食事をする、そんな姿が想像できます。一見雑然とした台所に見えますが、浪花では進歩的な台所空間が垣間見えます。復



元した町家のうち薬を商う大店の台所をぜひ見て下さい。井戸から汲み上げた飲めない水は、走り(流し)の横に貯水し炊事用とし、買った水は水壺に溜めて飲料水とします。水の使い分けが行われているのです。走りの横には煮炊きをする四口のヘツイがあり、さらに水屋が作り付けとなっています。非常に効率良く人が動けるように考慮した配置となっています。狭い空間をうまく利用しようとする工夫がそこに認められます。まさに、システムキッチンの考え方です。われわれの暮らしの基本が、実は江戸時代には確立していたと考えられましょう。

(学芸員 明珍健二)